

茨城高等学校・中学校

## 校長室だより

2023年7月20日

### 硫黄島からの手紙／散るぞ悲しき

7月も残り10日余りとなり、夏休みが目前です。間もなく暑い、暑い8月がやってきます。8月は日本人にとって特別な月です。6日・広島原爆の日、9日・長崎原爆の日、15日・終戦記念日など、78年前の戦争の記憶を紡ぐ機会が数多く訪れます。今回の校長室だよりでは、そんな戦争の記憶を伝える一編の映画と、一冊の本を紹介します。

2006年に公開された『硫黄島からの手紙』は、俳優としても著名なクリント・イーストウッドさんが監督・製作を務めたアメリカ映画です。日米の激戦が行われた硫黄島の戦いを、二宮和也さんが演じる西郷上等兵、渡辺謙さんが演じる硫黄島総指揮官・栗林忠道中将をとおして描いています。

硫黄島は小笠原群島に属し、東京の南方、約1250キロメートルに位置する海岸線長わずか22キロメートルの火山島です。年間平均気温が25度を超える亜熱帯気候に属するこの島の大地は岩と砂から成り、植物はほとんど育ちません。また、降った雨はすべて砂にしみこんでしまうため水を確保することもできません。日本の敗色が濃厚となった太平洋戦争末期、この硫黄島を奪おうと上陸してきた米軍6万と日本軍守備隊2万の間で、壮絶かつ凄惨な戦闘が行われました。しかし、そもそも絶海の孤島にすぎない硫黄島を日米両軍が奪い合ったのはなぜでしょうか。

ミッドウェー海戦（1942年）での敗北により守勢に転じた日本軍連合艦隊は、その2年後のマリアナ沖海戦で壊滅的な敗北を喫し、日本は中部太平洋の制海権、制空権を失ってしまいました。日本が絶対的国防圏としていたサイパン、グアムも奪われ、アメリカ軍はサイパンに長距離戦略爆撃機B29を配備、日本の本土空襲を行う能力を得たのです。とはいえサイパンから日本までの往復約5000キロメートルは、爆弾を搭載したB29が航続可能なギリギリの距離でした。

そのサイパンと日本のちょうど中間に位置するのが硫黄島です。山の多い小笠原諸島の島々の中で、硫黄島は例外的に平坦な地形を有し、日本軍の飛行場が建設されていました。アメリカからすれば、硫黄島を奪うことは、硫黄島の基地を飛び立った日本の戦闘機にB29が攻撃される危険を回避できるのみならず、日本空襲のためのより安全かつ有効な前進基地を手にすることを意味していたのです。

映画の冒頭、硫黄島の海岸線に塹壕（ざんごう）を掘る西郷上等兵たちの姿が描かれます。虫だらけの、しかも水のない島で来る日も来る日も塹壕を掘るだけの毎日に嫌気がさした西郷は、作業中に仲間の兵隊と「こんな島、アメ公にくれてやればいいのに！」と悪

態をつくのですが、折り悪しく近くを通りかかった上官にそれを聞きとがめられてしまいます。西郷たちが「非国民め！」と罵倒され体罰を受けていたその場を偶然通りかかったのが栗林中将でした。新たに硫黄島守備隊指揮官として着任したばかりの栗林中将は、島全体の地形や特徴を調査するため、数名の部下を連れて徒歩で巡回していたのです。制裁の理由を上官に尋ねた栗林中将は「君は、この二人を前線から退けて余りある兵力を持っているのかな？体罰はやめるように」と命じ、西郷たちを救ってくれます。「栗林閣下か、ありゃーいい司令官じゃねえか」。その日の昼休み、昼食抜きに罰となった西郷は、配給のコップ一杯の水を飲みながら栗林中将への敬慕の思いを言葉にします。

『散るぞ悲しき／硫黄島総指揮官・栗林忠道』梯久美子著（新潮社）は、太平洋戦争史上最大級の損害を米軍に与え、「5日で落ちる」と言われた硫黄島を36日間にわたって守り抜いた栗林忠道中将について記したノンフィクション作品です。これを読んで意外に感じるのは、命知らずで知られる米軍海兵隊の猛者たちを恐怖せしめた日本軍指揮官の、勇猛果敢な剛将のイメージとはほど遠い、緻密（ちみつ）かつ合理的で、人間的な温かみと軍人としての矜持（きょうじ）をあわせ持った人物像です。

1891年長野市に生まれた栗林忠道は、県立長野中学校を卒業後、陸軍士官学校、陸軍大学校へと進み、陸大卒業時には成績優等（次席）のため恩賜（おんし）の軍刀を授かり、1927年には駐在武官としてアメリカに駐在するという、軍人のエリートコースを歩きました。2年間のアメリカ駐在は、栗林に世界の工場と呼ばれたアメリカの工業力をまざまざと見せつけ、アメリカとの戦争は絶対に避けなければならない、との思いを強くさせたといいます。聡明で柔軟な頭脳を持った栗林は、アメリカの文化や考え方にふれ、合理的な思考力をさらに育んでいったのでしょう。

『散るぞ悲しき』には、栗林が硫黄島から家族へ書き送った手紙が紹介されています。硫黄島の蟻が兵舎を目指してぞろぞろ這い寄る様子がまるで“善光寺参り”のようだという話や、9歳の末娘“たこちゃん”をはじめ家族が夢の中に出てきた話、また家のお勝手の床から冷たい風が吹き上げるのを修理しないまま出征してしまったのを心配する手紙など、栗林がユーモアを愛し、家族を思う優しい父親であったことが伝わってきます。

家庭での栗林は、食事は大勢でにぎやかに食べた方がおいしいと女中も家族と同じ食卓に付かせ、面白い話をして皆を笑わせていたといいます。厳格を旨とした戦前の父親像、まして栗林がエリート職業軍人であったことを考えると、これは極めて異例のことでした。

本のタイトルとなっている「散るぞ悲しき」は、一ヶ月以上におよぶ戦いの後、弾薬も尽き、生き残ったわずかな部下と最後の突撃を行うことを決意した栗林が、東京の大本営に送った決別電報の末尾に記した辞世の歌に由来します。「国のため重きつとめを果たし得で矢弾（やだま）尽き果て散るぞ悲しき（国家のための重い責務を果たすことができずに、弾薬もすべて尽きてしまい、むなしく命を散らすのが悲しい）」がそれです。

硫黄島の戦いにあたって栗林には、安全な父島に指揮所を設け、そこから無線で硫黄島の指揮を執るという方法もありました。しかし栗林は、あえて硫黄島に入り将兵たちと運命をともにする選択をしました。自らへの特別待遇を禁じ、兵隊たちと同じ食事を食べ、兵隊たちと同じ粗末なテントや洞窟に居住しました。「散るぞ悲しき」という文言には、

絶望的な戦闘の中で国のために死んでいった人々への痛切な鎮魂の思いが込められていたに違いありません。

ところが栗林の決別電報が新聞発表される際、この歌は改変されてしまいます。大本営は「散るぞ悲しき」を「散るぞ口惜し」と改ざんして発表したのです。

著者の梯久美子さんはこう記しています。「栗林は死よりも苦しい生を生きよと言い、命の最後の一滴まで使い切れと命じてきた。勝利も帰還も望めぬ戦場で、潔く散ることさえも禁じた。その命令を守り抜いた将兵たちの、本土の人々が永遠に知ることのない生きざま死にざまをせめて言葉にすることが、2万将兵の生死を司る総指揮官の最後の務めであった。／その電報が大本営によって改変されようとは、このときの栗林には知る由もない。しかし“徒手空拳”という言葉が大本営のお偉方の心情を逆撫でするであろうことも（注1）、死んでゆく将兵を“悲しき”と嘆じることが帝国軍人にあるまじきタブーであることも、分かっていたはずである。分かっていたあえて認（したた）めたのが、この決別電報であった」

海から上陸してくる敵を迎え撃つ戦いにおいて、旧日本軍では水際での殲滅（せんめつ）作戦を伝統的な戦法としていました。上陸用舟艇が浅瀬の砂浜に接岸し、乗り組んでいた将兵が地上に降りるとき、敵は最も無防備な状態となります。その瞬間を逃さず、味方の最大火力を集中して敵を攻撃する作戦です。しかし、太平洋戦争末期においてこの戦法は、圧倒的な物量を誇る米軍を相手に通用しなくなっていました。海からの艦砲射撃や飛行機による爆撃にさらされ、海岸に築いた日本の陣地は敵の上陸を待たずして破壊されてしまっていたのです。海岸線に戦力を集中させた日本軍は、海空からの援護のなか無事上陸した敵兵によって、短期間で壊滅させられてしまうのが常でした。

戦闘能力を失った日本軍が最後にとった手段が“バンザイ突撃”でした。捕虜となる辱め（はずかしめ）を受けるよりも潔い死を選べという教えをたたき込まれていた彼らは、銃剣や日本刀を手に「天皇陛下万歳！」「日本国万歳！」と叫びながら敵陣への突撃を敢行し、玉砕（注2）をとげたのです。

硫黄島総指揮官に着任した栗林中将は、すでに着工されていた海岸線の陣地の建設を放棄させます。そして、硫黄島の地下に洞窟を掘らせ、迷路のような地下要塞を構築したのです。アメリカの国力を知る栗林は、伝統の水際殲滅作戦が失敗に終わることを見通していました。栗林の作戦は、自軍の兵力を温存したまま米軍を上陸させ、敵を島の内部におびき寄せた後に地下陣地からの攻撃をおこなう、というものでした。

栗林はそれまで日本軍が行ってきたバンザイ突撃を固く禁じました。そして、兵隊たちには「敵を十人殺さないうちは死んではならない」「最後の兵となってもゲリラ戦によって戦い抜け」と命じました。硫黄島の将兵たちには“勇敢に戦って潔く散る”などという贅沢は許されませんでした。彼らは死よりも苦しい生を生き、勝利も生還もありえない戦いを戦ったのです。

『散るぞ悲しき』によれば、栗林の作戦の目的は、硫黄島の戦いを長引かせ米軍にできるだけ多くの損害をあたえることにあったといえます。その理由は二つあります。一つは、硫黄島が米軍の手に渡り本土空襲の前線基地となって、一般市民が空襲で殺される事態と

なるのを一日でも遅らせることです。当時すでにサイパンには百四、五十機のB29が配備されていました。硫黄島が奪われれば、空襲によって日本本土が火の海となることは確実でした。栗林は妻・義井にあてた手紙に「もしまた私の居る島が攻め取られたりしたら、その上何百という敵機がさらに増加することとなり、本土は今の何層倍かの激しい空襲を受けることになり、悪くすると敵は千葉県や神奈川県のコスモス海岸から上陸して東京近郊へ侵入してくるかも知れない」と書いています。

二つ目の理由は、持久戦に持ち込み米軍に多くの死傷者を出させることで、アメリカに戦争の早期終結を望む風潮を生み出そうとしたことです。アメリカで暮らし、その国民性を熟知していた栗林は、アメリカ人が人的な被害を何よりも重く見ることを知っていました。硫黄島での米軍の死傷者が増えることで、アメリカの厭戦ムードが高まり、日本との戦争を早く終わらせたいという方向に世論が傾くことを栗林は期待していたのです。事実、硫黄島の戦いは日本よりも、勝利国であるアメリカで長く深く記憶されることとなります。“Battle of IWO JIMA”を戦った“General KURIBAYASHI”は、「アメリカをもっとも苦しめ、それゆえにアメリカからもっとも尊敬された男」と評価されているといえます。

ただし、こうした栗林の作戦が現地の将兵たちにすんなりと受け入れられたわけではありません。あくまで水際での上陸阻止を主張する声も少なくなかったといえます。映画『硫黄島からの手紙』の中にも、作戦を巡って栗林が部下と口論になる場面が描かれています。「洞窟掘りなど無駄です。艦隊の援護無しにはこの島は5日ともちません。潔く戦って散るべきです」という副官の訴えに、栗林は「あきらめるのですか？我々はこの島を死守せねばなりません。我々の子どもらが日本で一日でも長く安泰に暮らせるなら、我々がこの島を守る一日には意味があるんです！」と激しい口調で応じます。

もちろん映画はフィクションであり、実際にこのようなやりとりがあったかどうかはわかりません。しかし、洞窟での持久戦を選択した栗林の思いは、まさにこのことばに凝縮されているように思えます。米軍を島に一日でも長く引き留め最大の損害を与えるため、栗林は地下陣地にモグラのように潜み、徹底抗戦を決行したのです。

『硫黄島からの手紙』は重たい映画です。空襲や戦闘の中で虫けらのように殺されていく兵隊たち、戦いで失明し、部隊の足手まといになるまいと自害する将校、脱走して米軍に投降をはかり、友軍に捕まって殺害される日本兵、暗い洞窟の中で集団自決を強要され、絶叫をあげながら手榴弾（しゅりゅうだん）に覆い被さり死んでいく兵隊の姿などが、次から次へと映し出されていきます。その戦いに英雄は存在せず、救いや慰めもありません。映画館で最初にこの映画を見終えたとき、ずっしりと重いしこりのようなものを胸の奥に感じたことを記憶しています。

映画の終盤、これ以上の持久戦は不可能と判断した栗林は総攻撃を決意します。そして生き残った将兵を集め、鬼気迫る表情で訓示を行います。「日本は戦（いくさ）に敗れたりとはいえども、いつの日か国民が諸君らの勲功をたたえ、諸君らの霊に涙し、黙禱（もくとう）を捧げる日が必ずや来るであろう」

総攻撃の先頭に立ち敵弾に倒れた栗林中将は、瀕死の体を部下の手で海岸近くまで運ばれてきます。偶然その場に行きあわせた西郷上等兵は、硫黄島の戦いで何度も命を助けら

れた栗林中将と再会します。西郷に気づいた栗林は、自分の死骸を誰にも見つからない場所にひそかに埋めてほしい、と最後の願いを西郷に託すのです。

戦争は絶対悪です。いかなる戦争行為も美化されたり、讃美されることはあってはなりません。しかしその一方で、私たちが生きる今という時代が、78年前の戦争で、国のために、未来のために命を散らした数多くの犠牲のうえになりたっていることもまた事実です。私たちはそれを忘れてはならないし、未来に語り継ぐ務めがあるのだと思います。

「いつの日か国民が諸君らの勲功をたたえ、諸君らの霊に涙し、黙祷を捧げる日が必ずや来るであろう」という栗林の言葉は、目前に迫った死を受け入れるしかなかった将兵たちの心にどのように響いたのでしょうか？自らの死が意味あるものであることを信ずるに足らしめたのでしょうか？そして、栗林中将をはじめ先の戦争に散った数多くの人々が天上から現在の日本を眺めたとき、自分たちの犠牲は無駄ではなかったと思ってもらえるのでしょうか？私たちには想像することしかできません。

今回の校長室だよりを読んで少しでも興味を持った人がいたら、この夏、『硫黄島からの手紙』をぜひ観てほしいと思います。そして心の中に泡立つ何ものかを実感してください。平和は、何もせずに、あたりまえにそこにあるものではない、平和は、それを希求する人々の痛切な思いがあって、はじめて実現する奇跡のようなものかもしれない、そんな思いを抱かせてくれる映画です。

注1) 栗林の決別電報に含まれる「特に想像をこえたる物量的優勢を以てする陸海空よりの攻撃に対し、宛然（えんぜん）徒手空拳を以てよく健闘を続けたるは、小職自ら聊か（いささか）悦びとする所なり」を指す。大本営は当時、物量の差は精神力で補って戦えと将兵に命じていた。

注2) 玉のように美しく碎けるの意味から、太平洋戦争中、“全滅”を指す言葉として用いられた。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。